

福井商業高校

「げったじよぶ」

2018. 12. 23 上演1

この劇は、私達に「働くとはどういうことか」を考えさせるきっかけとなるものだった。

物語の舞台は2300年、人類は地上に住めなくなり、AIに支えられ地底で暮らしていた。ルルとララが脳以外は人工物のおばあちゃんの監督の下、労働の歴史について学ぶ。その内容では、バブル期や就職氷河期の雇用の様子、男女差別に浪人生差別など現在までの歴史に加え、AIによってなくなる仕事、AIに監督される面接など2300年までの未来についても描かれている。いろいろな時代で就職に困っているA子B子C子は自信をなくしていくが、「ありときりぎりす」の仕事に焦点をあてた話によって、それぞれ適材適所があり必ずみんな社会の役に立っているとわかり、それぞれの性格にあったやりがいのある仕事を見つける。

AIについてや、政策に左右される雇用の問題についてなど、台本を読むだけではとっつきにくい話をわかりやすくして楽しませる演出の工夫が各所に見られた。歌を交えるなど、基本的に明るく面白く演出されているからこそ、垣間見えるAIが発展する社会にある闇のようなものが印象に残った。

舞台装置には、つり物のビル群が使われていた。舞台の広い上の方のスペースを有効に活用するだけでなく、見上げたビルの威圧感から、仕事への得体の知れぬ恐怖を感じた。音響では北風の音で「氷河期」を強調しており笑いを呼んでいた。なにより場面転換のたびに流れる「じよぶじよぶじよぶ・・・」と唱える人の声は、いつのまにか私達がただ「仕事を見つける」ことを目的としてしまっていることを気づかせてくれた。照明には、暗い青や緑などの寒色が多く使われていて、能力を機械的に判断され、AIに仕事を奪われ、人間味を失っていく人物の心情が可視化されていた。また、衣装では、A子B子C子のジャケットの背中に蓄光テープで「A」「B」「C」と大きく描かれていて、「人間として」というよりも、記号で管理されている「没個性」を感じた。だからこそ、働きアリの多様な働き方に影響を受け、新たな仕事を見つけた3人がジャケットを脱いで現れたことは、働くことへの向き合い方が変化した結果だと感じた。

この劇から感じたこととして、大きく分けて二つの意見が挙がった。一つ目は、AIに仕事を奪われることへの不安、皮肉だ。二つ目は、そんな中でも私たちにできる仕事は見つけられる、そして、それは生きがいになるという希望だ。これらについて、「どちらかひとつではない」という意見があった。どんな時代にも、不安のなかには、少しの希望、希望の中には少しの不安がある。どちらに焦点を当てるかは人それぞれにしても、不安と希望の二面性がある中で生きていかなければならないことは紛れもない事実で、少しでも明るい方に進めるように、自分だからこそできることを探していく、結果としてそれが「働く」こととなるのではないだろうか。